二〇世紀初期太原縣にみる地域經濟の原基

黑田明伸

はじめに
一章　小農經營における二種類の現金收入
二章　太原縣晉祠鎭にみる地域經濟の原基
(1)　支拂協同體としての市鎭
(2)　市場階層における斷層
三章　自由參入の準則と國家介入
おわりに

はじめに

地域經濟とは何を意味するのであろう。地域という言葉をかぶせるからには、なにがしかの空間的限定を想定しているに違いない。ただ地域經濟という言葉を使う時は、國境で區切られた空間とは別の規模の空間を指そうとしているのがふつうである。國家主權により畫される場合はいざしらず、人々が網の目のように織りなす經濟的營爲というものは、そもそも空間によって畫されるものなのだろうか。つまるところ、實體として地域經濟などというものはあるのだろうか。研究者などが地方行政區畫に假託して、便宜的な表現として使用しているだけではないのか。だがもし實態において經濟的營爲がたしかに區切られているのだとしたら、そこにはいかなる動機が働いているのだろう。おそらく、その動機はそれ

それの社會の個性をさぞかし反映したものであろう。(1)

傳統中國において、賣買のために日常的に人々が往來する空間が限られていたことは、これまでの市集すなわち定期市の研究が明らかにしてきた。人々が一つの市集に集散するその距離は、交通條件などにより限られるのはたしかである。だが、人々の往來の空間的まとまりは、彼らの經濟活動すべてがその空間の內側で完結していることを意味しはしない。商品作物や副業產品は市集を越えた市場で購買されなければ、さばききれない。そもそも市集といっても、その包含する空間と人口にはかなりの幅があり、大小重なり合って存在している。人々の經濟的營爲の內にまとまりを見いだそうとする時、どの規模の空間で括ってみるのがよいのであろう。鍵は、空間を共有することの利便を探し出すことにある。(2)

ところが、このまとまりの存否を調べようとすると突きあたるのが、地方行政區畫の存在である。存在が不確かな地域經濟などとは違い、行政機構は明確な空間區分をもつ。省から府へ、府から縣へ、縣から區などを經由して村へ、と細分化していく地方行政區畫と、人々の經濟的營爲の空間的まとまりとはどのような關係にあるのだろうか。

もし地域經濟なるものが自律的に形成されるものであれば、上から下への單方向性が強い王朝の指令系統と衝突しないのであろうか。またもし逆に自律的な機能をもつ地域經濟というものが存在せず、市場の空間的まとまりが縣などの行政區分に淵源するのだとすると、すなわち傳統中國においては、人々の經濟的營爲は行財政機構によって總括されていたということになる。

本論が依據する基本的史料は山西省太原縣の赤橋村居住の學人劉大鵬の記した『退想齋日記』である。日記といっても個人の備忘錄ではなく、『退想齋日記』には他者の目を意識した見聞錄といった趣がある。日々の穀物の相場や、自ら短工を雇っての農作業のこと、村や鎭の祭祀の運營から、攤款負擔をめぐっての交涉、新聞などで得る政治情勢、と記述は多岐にわたっている。科擧廢止と光緒新政、民國成立、軍閥戰爭、閻錫山の村政建設、そして日本軍侵略と、めまぐるしい政治的環境の變化に見舞われ、劉も縣議會の初代議長に推されたりするなど、さまざまな役割を擔わされることにな

る。しかし赤橋村とその近鄰の晉祠鎭を定點とする約五〇年にわたる觀察は、二〇世紀初期に中國を搖るがした激動の様と同時に、人々の生活に枠組みを與えている變わらざる側面もかいま見せてくれる。(3)

さて本論では、經濟空間の吟味に先だって、その場の基礎を構成しているはずである家計の分析からはじめることにしたい。これまで、市場の構造把握と小農經營の分析とは別々の課題として設定され、兩者の關係が有機的に考察されることはなかった。本稿では、市場の重層性と、所得選擇肢を廣くもとうとする小農經營の性格とは不可分のものであるとの視角から分析を試みる。(4) まず小農たちの經營の實態からはじめよう。赤橋村と同じく太原縣に屬した黃陵村の農家調査を基に家計の特色を浮かび上がらせることにしたい。(5)

一章　小農經營における二種類の現金收入

ここでは黃陵村の農家調査が分析の對象となるが、先に『退想齋日記』からうかがえる劉大鵬一家の經營の實態を示しておきたい。

ある調査によれば太原縣の農家の經營面積のメディアン（中央値）は一・四四haである。(6) また『黃陵村』で農産物販賣收入を擧げている農家四五戸の經營面積の平均は三一・七七畝、メディアンは三〇畝＝約一・八haとなっている。劉の經營面積が主に小麥作に充てられる一〇畝だけだとすると、その面積は縣の中でも下位に屬する。劉の記述では春小麥の收穫を平年で一畝一石としているから、カロリー計算で成人一人の必要穀物量を年間二七九・三kgとすれば、それを生産するためには三・四畝が必要となり、收量が八斗であれば、四・二四畝となる計算になる。(7) 同じ華北でも二年三毛作が多い山東・河北と違い、山西は小麥あるいは粟一毛作がほとんどであるとされている。ただ赤橋村も含む晉祠鎭一帶は水量豐富な晉祠難老泉のおかげで灌漑の條件に惠まれており、珍しく水稻作が行われていた地域である。劉の記述でも水田耕作をしていたことがうかがわれる。(8) いずれにしろ、數畝の耕地を複數あわせてようやく一〇畝餘りの小麥畑と水田とでは、

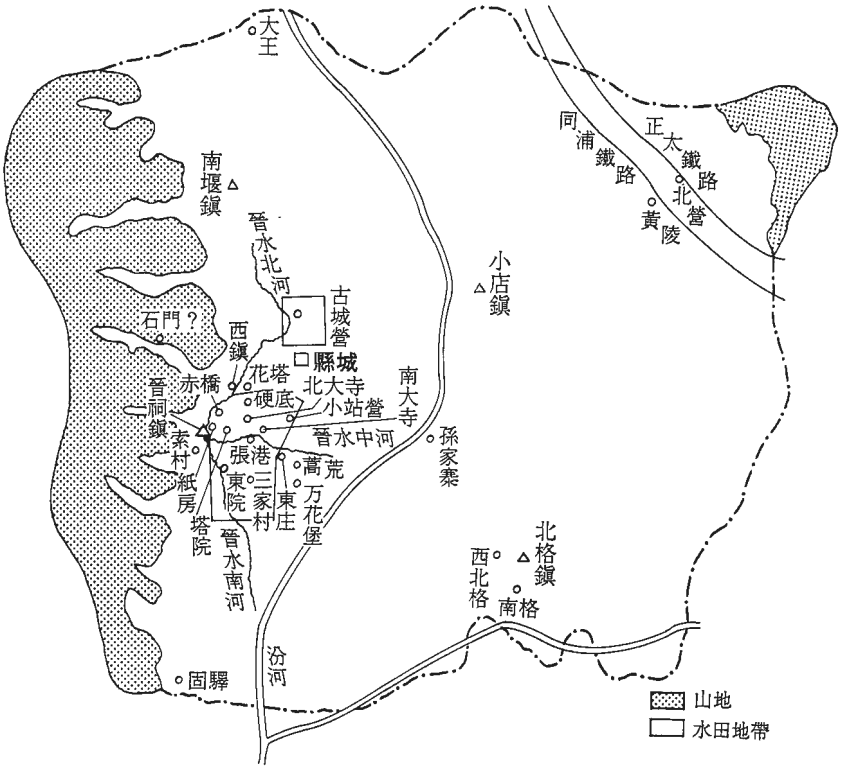
大王
南堰鎮
晉水北河
古城營
石門？
西鎮
縣城
赤橋
花塔
北大寺
南大寺
晉祠鎮
硬底
小站營
晉水中河
孫家寨
索村
張港
蒿荒
紙房
東院
三家村
東庄
万花堡
塔院
晉水南河
汾河
固驛
小店鎮
同浦鐵路
正太鐵路
北營
黃陵
北格鎮
西北格
南格
山地
水田地帶

圖1 太原縣略圖

成人三人ほどを支えることができるだけということになる。劉は、自家の作物のみでは家族を養えないとしばしば記述しているが、劉家には男女老若あわせて一六名がいたことになっており、本人と長男の二人の擧人を擁する家が食うに困るというのは、けっして修辭ではないのである。(9)

では實際にどうしていたか。一九〇四年の記述より劉は家庭教師謝禮としてそれまで年一二〇兩は受け取っていたことがわかる。(10) これは穀物一〇石にだいたい相當するから、一石が一畝から收穫されるとして、この收入を加えることにより劉一家は約二五畝＝一・五haを經營する太原の標準的規模にようやく達していたのである。また民國になってから、鄰村の西鎭村在住の郭というものに數畝の水田を小作に出しており、小作料收入があったはずであるが、それほどの額ではなかったにちがいない。畝當たりが收量二石弱で、劉が假に五畝を小作させて、半額を小作料として徵收していたとしても、せいぜい五石弱である。(11)

したがって、科擧の廢止と、雇用主であった票號の辛亥革命に前後する沒落とによって、この家庭教師收入が途絶すると、いきおい劉一家はそれを補塡する手段をみつけねばならなくなる。(12) その結果が、民國期になってから始める採炭業經營である。水田を小作に出したのも、時期がほぼ同じであり、關連があるのであろう。

さて、この地方の採炭業は、農民が十人餘で出資して經營するものもあったようであり、晉祠西方での採炭業は小規模の營業がほとんどであったようである。(13)『黃陵村』では縣內の經營者は大小六〇名に及ぶとしている。劉が出資したのもそうした一つであったに違いない。合股の主催者は他にいるようだが、日記に合股仲間としてでてくるのは楊九錫である。楊は晉祠鎭の錢莊の經理であったのが、おそらくは辛亥革命のあおりをうけて、一二年に閉店に追い込まれてから、晉祠西方の石門にきて採炭業の經營に轉じた者である。(14) 現場での經營は主に彼が擔っていたと思われる。

現場で採掘しているのは「窰黑」と蔑稱をもって呼ばれもする勞働者である。劉らの炭鑛では三〇人ほどが雇用されていたようである。(15)『黃陵村』ではこの太原縣西山區大清鑛區の鑛夫は一三〇〇人としている。劉は家族を養うに足る土地

をもたない小農でありながら、一方では労働者を雇用する企業経営者でもあったのである。

ところで小農としての劉は農繁期には必ず數名の短工を雇用している。(16) 短工雇用は特別な経済的餘裕のある家に限定されていたのではけっしてなく、中下位より上の規模の農家ならほとんどが雇用していたといってもよい。日雇いの賃金相場は應募者の集散場所ごとにおおよその相場が日毎に建っていたようである。春小麥の收穫を迎える七月中旬は最も繁忙な時期であるが、一九一八年七月一五日の記述では、赤橋村の名の由來であるところの豫讓橋に、雇用に應ずる者二〇〇人以上が集まって、西鎭・花塔・硬底村に散っていったという。假に赤橋村も加えて四村が農業勞働者市場を形成していたとする。殘されている史料からこの四村の世帶數が二五〇から多くとも三〇〇戸だと推定しておく。(17) その中での二〇〇人餘の雇用ということになる。

さて劉家の經營からわかることは、第一に、いささか特殊な職種ではあるが、零細な農地經營を家庭教師謝禮や採炭業經營收益で補塡する關係にあったこと。第二に、農地にしろ採炭にしろ、短期あるいは長期の雇用勞働の存在が前提となっていたことである。

次に具體的な農家家計の調査に基づいて、右の劉家の性向を相對化してみたい。黃陵村は汾河を挾んで赤橋村とは逆の東側に位置する。晉祠の湧水地帶と違って灌漑の便に缺けるため水田はない。粟作一毛作を主とし、灌漑地では小麥作が多くなるという、山西省のむしろ標準的な農村である。(18) ただし鐵道沿線にあり、太原省城（陽曲縣）との往來に便がある、という特色がある。

黃陵村の調査から九二農家中實に七五戸が農外職業として苦力を擧げ、雇農と回答したのが二四戸であった。『退想齋日記』の記述からかいま見られるように、雇農需要の逼迫は軍隊も含めた他の土木事業などの勞働力需要と關連しているととらえられていた。(19) 苦力と雇農を重複回答したのは二一戸に上る。したがって兩者には互換性があり、九二戸中七八戸が雇用勞働に應じて貴重な現金收入を得ていたということを確認しておかねばならない。しかもその七八戸の中には土地

表1　黄陵村農家經營の事例

集計番號	男子(11—60歳)	家族(11—60歳)	經營面積(畝)	灌漑面積	勞賃收入(元)	農産物販賣	副業收入	現金收入
36	0	1	9	0	0	10.32	18	28.32
38	6	12	88	30	50	124.5	—	224.5
40	1	2	52	9	10	30	—	151
45	4	6	44	3	25	—	3	348
50	5	8	42	0	115	—	—	115

36は6畝，38は2畝，40は20畝を貸し付け，45，50は12畝を小作している。
『北支農村の實態——山西省晉泉縣黄陵村實態調査報告』附表より

を貸し付け、副業に地主と附記されているものもある。集計番號三六、四〇、四五とされたその三戸に共通しているのは家族人口が所有地面積に比して少ないということであり、同規模の所有地をもつが家族人口の多い集計番號三八、五〇の農家が自作地のほかに小作をしているのと對照的である。三六はいわゆる男手がないのに對して三八は六人の男子がいる。經營面積は男子數と家族人數双方との間で相關係數が〇・五以上であり、どちらも兩側確率は充分に低く相關關係があることを示唆している。

つまり農家、というより農地經營もしている家族經營といった方がよいが、彼らのほとんどが勞賃收入を有力な現金收入手段として內包しているということである。各經營における一一歳から六〇歳までの男子數と勞賃收入との相關係數は〇・七二となっている。男子數の多い經營ほど、その勞働力を利用してより多くの勞賃收入獲得や勞働力過少の家の土地の小作に向かう關係が推定しうる。

『黄陵村』では農産物販賣收入のあった農家が、どの作物を何月にどの市場に向けて賣ったかを、分類してくれている。農産物販賣收入があったとされる四五戸の大部分は、村內市場か、太原市場か、庭先賣買か、いずれか一つに向けて賣却しており、重複して賣却しているのは四戸にすぎない。もちろん、軍事占領下での實施であるが故に、調査自體の遺漏の可能性や市場が極端に疲弊していたであろうことが、結果として販賣量に影響を及ぼしたであろうことも考慮せねばならない。しかし、商品性が高いとされる小麥が一部太原向けに賣却されていたのを除いて、ほとんどの穀類が村內市場向けであったのに對して、蔬菜の多數が太原市場か庭先賣買であったという對

照性は、右の制約條件をもっても否定することはできない性格のものである。

ところで、この村内市場とは、けっして黄陵村の内のみでの賣買をさばくものではない。黄陵村は近鄰の小店鎭と隔日の周期で市場を開き、周邊の農村から買い手と賣り手を集めていたのである。つまり穀物は定期市でもっぱら賣却されていたということになる。調査對象となった黄陵村にはたまたま市集があったのである。

もう少し調査統計を解析してみよう。直感でも充分に認識しうるが、販賣物が穀物であるか蔬菜であるかということと、販賣先が市集であるかそれ以外であるかということ、この二つの屬性の關連係數は〇・九七という極めて高い數値になる。穀物は市集に、蔬菜は市集外に向けて賣られたのである。さらに各農家の現金收入から勞賃收入・農産物販賣を除いた數値と、蔬菜販賣收入ならびに非市集向け販賣額との相關を調べてみると、相關係數が前者〇・四三、後者〇・四九とさほど高くはないものの、兩側確率がそれぞれ〇・〇〇三と〇・〇〇一で、假に有意水準一%としても、相關があることがうかがわれる。ところが、同じようにその數値と、穀物販賣收入ならびに市集向け販賣額とで調べてみると、相關係數が前者（一）〇・〇二、後者（一）〇・〇八で、兩側確率もそれぞれ〇・八七七と〇・五九八で全く相關性が認められない。

つまり蔬菜を販賣する農家は定期市ではなく直接太原市場向けに販賣する傾向にあり、その傾向の強い農家は農外收入も多いという關係がうかがわれるのに對して、穀物を販賣する農家は定期市で賣却する傾向が強いが、その賣却規模と農外收入とにはほとんど相關性が認められない、という結果になる。(20)

以上の解析結果から、農業收入と農外收入という形式的な分類よりも、穀物を主とする農村市集向け販賣と、非穀商品作物と副業產品からなる超市集向け販賣とに、販賣先市場によって分けることの方が、農家經營の實態の分類には有意で

表2　黄陵村における農產物販賣の屬性

（單位：元）

	穀　物	蔬　菜	
村　内	1081.12	145.5	1226.62
非村内	127	1176.41	1303.41
	1208.12	1321.91	2530.03

『北支農村の實態——山西省晉泉縣黄陵村實態調査報告』附表「農產物販賣表」より

あるということになる。

容易に豫想されるように、非穀商品作物や副業産品は生産者の生活空間を離れた市場に向けられるが故に、個別の商人との關係が深くならざるをえない。また生産者の現地の狀況とは無關係に、より廣域の市場の所得の增減に、賣り上げそして相場が直接左右されることになる。それに比べると市集への穀物賣却は、限られた生活空間の中での實物需給を基礎にして、多數の賣り手と買い手の競りの場を介しているだけ、現地の外からの影響に對して緩衝がきいている。他市場例えば天津方面での高騰は市集から通年以上の穀物を引き上げさせもするが、逆に低落した相場の影響下では、餘剩穀物保有者は賣り控えて保藏にまわす選擇をする。

『黃陵村』の調査で、專業農家として分類した經營は現地市集向け販賣が主で、兼業農家として分類した經營は現地を越えた市場の景況に依存していたということになる。ただし、兩者の間の境界は可變的である。農家の經營耕地面積は五畝から八八畝の間に散らばっているが、數十畝の經營をする農家でもほとんどは數畝の耕地の集合にすぎない。[21] 各經營にとって、複數の零細地片は他のいくつかの農外收入と並列した、所得獲得手段として勞力投下を待つ選擇肢にすぎないのであって、どのような勞力配分がその時期の條件に最適であるかを判斷した結果、あるものは專業的外觀を呈し、あるものは兼業的となるのである。

勞働力の販賣も、穀物生産の周期と連動した近鄰の短工市場向けと、季節性が薄められた市集を越えた範圍でのものとに分類しうるが、こちらは生産物の選擇以上に兩者の垣根は低く、一方が一方を引き合う關係になっている。

さて、劉大鵬一家の經營は、兼業農家の分類に入る。黃陵村では靴製造に從事して、市集の外から現金收入を得る家計が多かったが、[22] 劉家の場合はその靴製造の代わりに家庭教師謝禮か採炭業經營收益が置き換わったにすぎない。土地經營が零細であったから、農外收入に賴るというより、農業も含めて勞働力を生かす收入源が多樣にあるからこそ、土地所有が零細なままでも家族成員を增加させえた、という逆の文脈でとらえた方が、[23] 劉家の實態にはふさわしい。そしてその文

表3　黄陵村における月別農産物販賣　（單位：元）

月	村内	太原	庭先	計	穀物	蔬菜
1	0	20	0	20	0	20
2	0	0	0	0	0	0
3	16.5	0	15	31.5	24	7.5
4	42	0	15	57	57	0
5	0	0	0	0	0	0
6	3.75	70.75	43.3	117.8	17	100.8
7	126.25	48.75	43.3	218.3	115	103.3
8	192	122.17	0	314.17	214.5	99.67
9	137.2	275.17	48.3	460.67	90.7	369.97
10	409.02	269.5	100	778.52	377.52	401
11	15	70	0	85	15	70
12	284.9	132.17	30	447.07	297.4	149.67
計	1226.62	1008.51	294.9	2530.03	1208.12	1321.91

出所は表2と同じ

脈で理解する方が、就業可能家族一人當たりの經營面積と家族一人當たり現金收入が相關係數〇・六八九、兩側確率〇・〇〇〇の正の關係にあるという結果と合致する。これまで思われてきたように、土地の零細さ故に現金收入を求めるという因果關係であったならば、一人當たりの土地が狹いほど、一人あたりの現金收入が高いという負の關係にむしろならねばならない。

農業周期に基づく勞働力需要の大きな季節較差を基調として、現に賦存する有閑勞働力を雇用を通じて流通させようとする動きが働いていたことは間違いない。

なお、農産物の販賣市場について、次の二章での分析との關わりから、次の二つの點を確認しておきたい。

一つは農産物販賣の季節較差の大きさである。**表3**は農産物販賣收入があると回答した農家群の月別の販賣額である。七月から十月までの麥の刈り入れから粟の收穫の時期にあたる四ヶ月の間に、蔬菜も含めて、農産物販賣額の七〇%が集中している。ただし蔬菜よりも穀物の方が月ごとの變動幅の大きさが目立つ。いずれにしろ一月から五月にかけては、農産物販賣は非常に低調である。農産物の賣買に伴う現金授受において繁閑の差が激しいことを銘記しておきたい。このことは春夏に低く秋冬に高い利率の季節變動とも連動す

表4　山西各地の物價趨勢

年	天津小麥(擔)	正定	壽陽	忻州	寧武	太谷	臨縣	晉祠粟(斗)	晉祠小麥
1906	—	—	—	—	37	—	36	1150文	—
1907	—	60	—	—	35	—	43	1200	1500文
1908	—	48	—	—	41	—	53	—	—
1909	—	52	—	—	41	—	49	—	—
1910	—	62	—	—	43	—	58	—	—
1911	—	72	—	—	41	—	62	—	—
1912	—	67	65	58	25	74	47	—	1100
1913	6.71元	66	62	64	27	72	87	—	1500
1914	6.67	63	55	64	30	60	87	—	—
1915	6.51	62	57	64	34	70	101	1300	—
1916	6.58	67	67	80	45	105	139	2000	2000
1917	8.29	78	72	88	45	138	165	1550	1850
1918	6.63	57	73	80	44	130	138	1850	2500
1919	6.2	70	53	60	44	143	109	—	—
1920	8.89	77	110	104	42	137	105	—	—
1921	8.8	106	110	93	52	127	183	新斗1100	—
1922	8.99	96	97	105	54	141	186	—	新斗1100
1923	9.43	94	100	89	61	127	204	1100	1400
1924	9.15	89	110	109	90	109	174	—	—
1925	10.25	77	133	110	126	90	159	—	—
1926	9.56	100	100	100	100	100	100	5.5角	7.5角
1927	11.11	101	77	85	85	121	99	—	—
1928	11.39	106	86	132	88	190	121	—	—
1929	11.69	109	119	171	127	224	199	米	—
1930	11.42	104	150	—	184	—	282	28角	15
1931	9.96	102	110	—	101	—	238	—	—
1932	9.47	—	—	—	99	—	—	—	10
1933	7.69	—	—	—	—	—	—	11.5	—
1934	6.91	—	—	—	—	—	—	—	3
1935	6.66	—	—	—	—	—	—	—	—
1936	8.51	—	—	—	—	—	—	22.5	—
1937	—	—	—	—	—	—	—	—	15

天津は Nankai University, *Wholesale Prices and Price Index Numbers in North China*, Tientsin, 1938.

晉祠は『退想齋日記』。他は1926年を100とする指數で J.L. Buck, *Land Utilization in China*, Statistics, Nanking, 1937, p. 149.

表5　1913～29年の山西各地と天津物價の相關

（　）は兩側確率

相關係數

	正定	壽陽	忻州	寧武	太谷	臨縣
天津	.861 (.000)	.720 (.001)	.829 (.000)	.827 (.000)	.595 (.012)	.388 (.124)
正定	x	.611 (.009)	.713 (.001)	.636 (.006)	.611 (.009)	.469 (.058)
壽陽	—.027 (.922)	x	.747 (.001)	.733 (.001)	.362 (.154)	.610 (.009)
忻州	—.011 (.967)	.385 (.141)	x	.783 (.000)	.765 (.000)	.540 (.025)
寧武	—.264 (.324)	.353 (.180)	.310 (.243)	x	.437 (.080)	.371 (.143)
太谷	.242 (.366)	—.119 (.660)	.601 (.013)	—.122 (.652)	x	.489 (.046)
臨縣	.287 (.281)	.517 (.040)	.424 (.102)	0.97 (.721)	.348 (.186)	x

天津を制御した偏相關係數

る。

いま一つは價格趨勢の地域間の連關性についてである。**表4**はロッシング・バッグらの調査が殘した物價年次變動指數と天津の小麥相場の年平均であり、**表5**はその各地間の一九一三年から二九年までの數値の相關係數と、天津の値を制御した偏相關係數である。山西省は河北省への穀物移出地域となっており、天津の穀物相場との連動が豫想される。まず單純に二項目相關を算出した**表5**の上半部をみてみよう。結果は、豫想通りに天津穀物相場ことに小麥相場との相關が極めて高い地域と、さほど高くない地域とに分かれた。前者は正太・京綏鐵路沿線であり、同浦鐵路開通が遲れた太谷縣と鐵道沿線からはずれた臨縣は後者になった。長期的な趨勢ではおおよその同調がみられるが、年次變動を追っていくと、鐵道で直結している條件がなければ、それほど地域間の物價は連動していないということになる。

圖2に示した略圖で、虛無假説を檢定する兩側確率が一%未滿、すなわち信賴性が九九%以上である地域

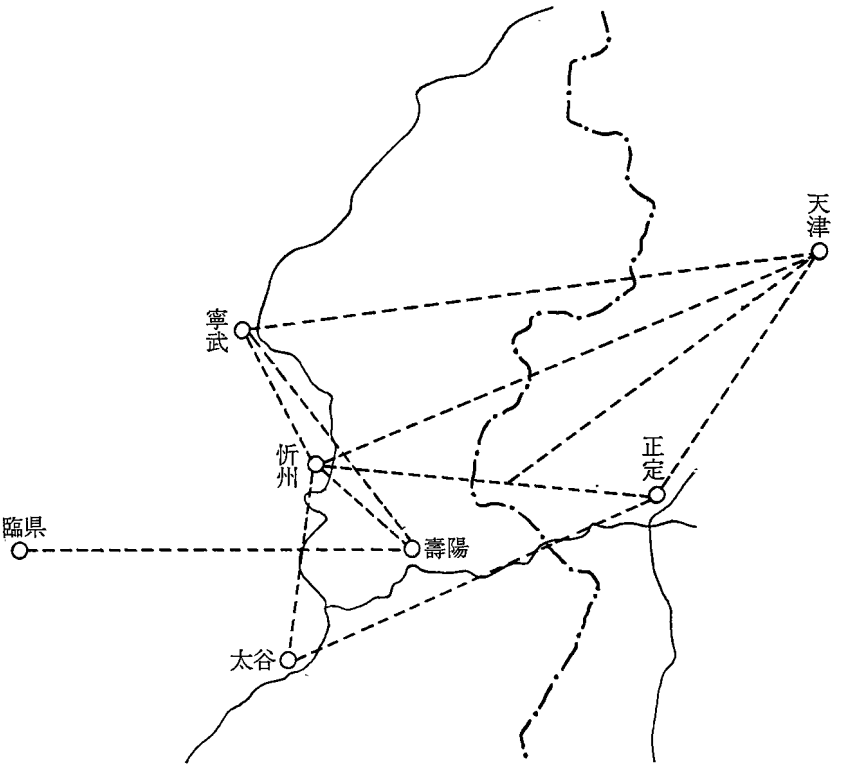

圖 2　各地の物價趨勢の相關

間を破線で結んでみた。注目すべきは、天津との相關性がそれほど高くない太谷と臨縣が、それぞれ忻州そして壽陽との間にかなりの相關性をみせていることである。忻州も壽陽も、天津との相關性はかなり強い。そこで天津の値が一定だとすると各地の相關性はどのようになるかを、解析したのが、**表5**の下半部の偏相關係數である。天津を制御した場合、問題の太谷と忻州、壽陽と臨縣の間の相關性は、他の二地域間より頭抜けて高いことが明らかとなる。

表5の上半部と下半部では、太行山脈を挟んだ河北の正定と山西側の壽陽・忻州・寧武の間、太原市を挟む太谷と寧武・壽陽の間の正負の符號が逆になる。このことは天津の相場變動の強い影響が山西各地の物價趨勢の多様性を覆い隠していたことを示す。同時にその影響はよどみなく地域間を傳わっていくのではなく、天津～忻州～太谷あるいは天津～壽陽～臨縣というように、多環節的に傳わっていく構造をなしていたことをうかがわせる。(24)

また、二六年から二八年にかけて軍閥混戰に伴う交通混亂の中、天津小麥相場に明らかなように華北沿岸部は物價騰貴に見舞われるが、反對に山西省各地は沿岸部向け穀物移出の停止とともに物價は沈滯氣味になるという、對照的な現象を呈したことを、行論との關係から指摘しておく。

二章　太原縣晉祠鎭にみる地域經濟の原基

一章では、小農たちの經營に、所得手段を多様化していくことで、勞働力分配を效率的にしていこうとする傾向が一般的にあることを示唆した。ただそれでも季節的な周期性が強い市集向けの販賣と、日常的生活空間を越えた空間への販賣とに、小農經營を二つの志向に分類することが可能であった。この二つの志向の差を手がかりにして、小農たちが依存していた市場の空間の階層性を解いていきたい。

(1) 支拂協同體としての市鎭

さて、市場は賣り手たち買い手たちの競爭の場である。まず確認しておかねばならないことは、その競爭の方法である。中長期的にみて安定した規模の賣買が行われることが豫測可能であれば、その條件においては、原價を切り下げるというようなことが、競爭に勝ち抜く有力な手段ともなる。しかし、傳統中國においては、太原地方もそうであったように、競賣買あるいはスポット賣買が、財そしてサービスの交換における主要な方法であった(25)。市集こそはその競賣買の場であった。その場を設定する仲介者の役割を租稅徵收との關係から一定の範圍の人々が寡占することはあったが、基本的にはあらゆる人々が賣り手としてあるいは買い手として參加できる、開放された場である(26)。そして、開放してより多くの賣買を集めることこそが、競りの結果が適正であることを示すことになった(27)。『退想齋日記』に穀物や貨幣そして短工の相場の騰落が日毎のものとして記述される様は、競賣買が市場における競爭の方法であったことを反映している。

ただ競りの場に賣り手と買い手が集まってくる範圍は、競りの對象となる商品によって異なった。山東のある市集では、短工市、穀物市や輸出されたりもする胡桃などの山果市などいろいろな競りの場が設定されていたが、賣り手の集まる空間の廣狹に差があった(28)。やはり最も狹いのは短工の場合であろう。なぜなら農繁期の勞働力はまさしく日單位で求められており、いわば蓄積のきかない商品なのである。移動に要する時間と勞苦を考慮すると、需給調整の空間が、滯貨が可能な實物商品のそれと比べて狹くなることが豫想される。

實際、穀物の集があるところはほぼ短工市場が存在したとみなしうるが、短工の需給調整は實物の市集のない地點でも行われていた(29)。先に紹介した劉の居住する赤橋村にある豫讓橋に集まった短工が近接の西鎭・花塔・硬底村などへ雇用されて散っていったとの敍述は、晉祠鎭の東北の、縣城に通じる位置にある豫讓橋を中心として、數村が短工市場を形成していたことを裏附けてくれる。劉は日記の他の二箇所で村ごとに農業勞働者の日雇い賃金が異なることを書き記している

が、複數の村が同じ賃金であったりすることから、單一の村で獨自に短工市場ができあがっていたのではなく、やはり近接するいくつかの村が農業勞働者の需給調節の場として機能していたものとみられる。(30)

集まった雇農が、その數村の中に居住するものなのか、外部からきているのかは定かではない。だが、次のように考えてよかろう。まず雇農市場は開放的であり、短工相場に相當な、例えば數倍の地域差が開いた時には遠隔地からも短工が流入してくるということである。少なくとも縣外からまとめてくることがあったことが、日記からも確認される。(31)しかし、近接する村でありながら、五割ほどの差が生じることもまあったことに注意しなければならない。この村ごとの短工日當の差は陽曲縣での調査でも記されている。(32)もし短期勞働供給を非居住者に依存しているのであれば、彼らは同じ移動するのであれば報酬の高い地域を選擇するであろうから、これほどの差は生じにくいにちがいない。やはり範圍内に居住するものが自己勞働を賣却してやるのが基本であったとみなすべきであろう。

この短工の競りの場を最小限の單位として、その上に穀物を中心とする市集、さらにその上に家畜の賣買を伴う市集、そして山果あるいは桐油などのような特殊な移輸出商品の集荷のための空間が重なるというように、規模を廣げながら、小農が自らの商品を持參することを前提にした競りの空間が幾重にも重なっていたのである。我々が商品のみに着目するなら、諸商品の市場圈の地層を横から確認するにとどまる。しかし市場空間は、小から大へと同心圓狀にただ廣がっていたのではない。廣がりに區切りを與える、ある動機が働いていた。(33)

劉の日記で、「本日より急騰した」というように、日をもって意識される穀物價格の趨勢は、「吾が鄉」晉祠鎭のものである。「吾が里」、すなわち劉の居住する赤橋村での市場行爲は實質的に晉祠鎭に歸屬していたといえる。赤橋村には十數軒の商店があるが、正月の仕事はじめなどは晉祠鎭のそれを待っておこなわれていたという。その晉祠鎭自體には百軒を越える商店が軒を連ねていた。中心的な市鎭の相場に周邊の諸商店がしたがう關係になっていたのであろう。

赤橋村のように晉祠鎭の穀物相場に準據している村がどれほどひろがりをもっていたのかは、不明である。太原縣は行

政區畫上、縣城周邊を第一區とし、城外を四つの區に分け、それぞれの區には常設商店が並ぶ市鎭がある。晉祠は第四區に屬するのだが、第二區の小店鎭と黃陵村の先述のような關係からしても、他の縣の事例からしても、[34]第四區にも晉祠以外の穀物市集開催があったとみなすのが妥當である。晉祠の迎神賽に協力する村を列記している記述があるが、晉祠鎭はその一〇村餘りを束ねる穀物市集の一つにすぎなかったのかもしれない。ただし、灌漑用水に惠まれ、山西では商品性の高い稻と小麥を產出するため、他よりも交易量は優っていたにちがいない。[35]だが晉祠鎭は單なる農產物集荷地であったのではなく、ある重要な機能を共有する空間の中心だったのである。

一九一三年六月一九日の『退想齋日記』に興味深い記述がある。縣城の商會はできたばかりの縣議會に働きかけて、西南地區での銀錢兌換と錢票發行を禁止するようにしむけている、というのである。背景には、辛亥革命とそれに伴う票號の沒落により、山西省が陷っていた商業不振がある。その不況の中でも投機含みの兩替と錢票發行は、有力な營利手段であり續けた。そのため、縣城にも少なくとも四〇軒の錢票發行の商店があったようであるが、彼らはその利益の獨占をねらって行動にでたのである。晉祠鎭は縣城の西南の中心市鎭であり、縣城商會の行爲は西南地區の晉祠鎭からの銀錢兌換と錢票發行の機能を公權力を利用して奪おうというものであった。

晉祠鎭の商店は地域間決濟に必要な銀と地域內の日常賣買に使用され相場を建てている錢との兌換にたずさわり、そして自己の信用に基づいて錢票を振り出していたのである。ただ、銀錢兌換をめぐる投機の過熱は、太原省城（陽曲縣）や票號の基盤であった太谷縣のように、銀そのものの蓄積が相應にある都市でこそしばしば問題になったが、[36]それ以外の商業地にとって問題となったのはむしろ錢票の信用の維持の方であった。そしてその錢票の發行をめぐって、利害を對立させる縣城の商人たちと城外市鎭の商人たち、という圖式になっていた。地域經濟の空間的限界をめぐる問題の核心が、ここ錢票に隱されている。ひとまず、錢票はいかにして受領されていたのか、檢討してみよう。

錢票はとりもなおさず、銅錢のちには銅元を兌換貨幣として一見額面拂いを保證した信用通貨である。一吊すなわち一

〇〇〇文を額面とするものが最も多いが、二吊、三吊あるいは五〇〇文といった様々な額面のものが存在した。また吊にも地方により吓陌慣行があるから、兌換した際に額面通りの枚數の銅貨が渡されるとはかぎらない。

山西省は最も銅元流通が遅れた地方であり、『退想齋日記』にあらわれる錢建て價格は、基本的に制錢建てということになる。物價上昇がさほどでもない一九一〇年代でも日雇い雇農の食事抜き賃金として一〇〇枚以上必要だったように、零細な額面しか代表しないため、市場の交易において大量の枚數が準備されねばならなかった。(37)

そこで一章の**表3**を再び見てみたい。既述のように、農家の側の農産品の賣却にはかなりの季節較差がある。一月から三月までの間には全農産物賣却額の二・〇%しかさばかれないのに、八月から一〇月までの間に六一・四%が賣られているのである。春にも穀物市集は開催されているのだから、實態においてこれほど繁閑の差がつくことはないとも思われるし、また多毛作を行い得る地方であれば、當然較差の周期は短くなるであろう。

しかし、黄陵村調査の頃には山西ではすでに銅貨は市場から退場しているが、小農たちに手渡す大量の零細額面の貨幣が、秋などの特定の時期に集中的に需要されることに變わりはない。一九三〇年代半ばに山東省の膠縣の馬店集で行われた事例調査では、二千人ほどの人出の中で、大洋一元を銅貨二四〇枚の割合で銅貨に換える兩替屋が三〇人もおり、その數は白菜など蔬菜を賣る五〇人に次いで多かったとする。(38) これほど兩替に携わる者がいるということは、つまり例えば青島などのような外から銀元を持參して市集で銅貨に換えて集荷する者がいるということを意味する。この調査は四月末のものであるが、繁忙期であれば、兩替需要はより高まる。その時、小農たちに手渡される零細額面通貨は、外地の商人がその通貨を大量に持參しないかぎりは、閑散期に市集圈の内に退藏されていた貨幣をひきだすことによって間に合わせなければならない。

しかし實際には短期の需給逼迫に見合っただけの通貨を容易には引き出せないのである。貨幣需給の逼迫は利率の變動と直結する。やはり錢票が盛んに流通していた濟南では、利率は春一分、夏八厘、秋一分八厘、冬一分五厘と變動してい

たとされる。(39)

彈力的に貨幣需要に對應できなかった時、市場は銅貨自體を變容させる。それが小錢すなわち劣質な銅錢の流通である。太原縣では、一八九七年と一九〇七年に二度同じように市中の銅錢に劣質な小錢が混じり問題となり、どちらも太原知縣が小錢禁止令を出している。ただし、前者は銅錢不足による錢貴の下でのものであったのに對し、後者は逆に銀貴すなわち錢賤の下でのことであった。いずれも全國的な銀錢比價の趨勢と同調したものであるが、錢貴・錢賤と逆方向の變化にもかかわらず、銅錢不足をもたらしたことは共通していた。前者はもちろんとして、後者の銀貴においても錢建て物價を上昇させる點においてやはり銅錢不足を招來するのである。(40)

さて一九〇七年の小錢禁止令には後日談がついた。小錢を混用して兌換請求に應えていた錢票發行商號が、小錢禁止により兌換請求に耐えられなくなり、取り付け騒ぎをおこして、閉業を餘儀なくされるものが出たのである。銅貨の供給は、錢票の振りだしにより、需要の季節較差に彈力的に對應しうるようになるが、問題はその兌換準備を確保しうるかということにある。

では、どれほどの錢票が流通していたのであろうか。話をもどそう。一九一三年の縣城商會と市鎭の側の對立以後も、錢票發行は問題となりつづける。一九一六年に前年の取り付け騒ぎを承けて、錢票の兌換性維持と錢票振り出しの新規參入を防ぐために、太原縣城商會は商會の押印のあるもののみ通用させようとし、錢票振り出し元と對立する。その時に調査したところ、押印入りの錢票が四萬八千吊餘りであった。無印の錢票はそれを上回ること數千吊ではすまないと、劉は記述している。劉にとっては無印の錢票の方の多さと、それを統制しようとする理不盡さを記したかったが故の記述であるが、振り出し商店四〇軒あまりとしているから、われわれは一軒平均二～三千吊を振りだして總計發券殘高一〇萬吊餘すなわち制錢一億枚相當にのぼっていたという、おおよその全體像をつかむことができる。(41)

この一〇萬吊は縣城の商號の發行によるものであり、城外のものは含まれてはいない。假に少なく見積もって、晉祠鎭

の商號一〇〇餘のうち一〇軒のみがおのおの二千吊ずつ振り出していたとして、それでも制錢二千萬枚に相當する。

錢票は一般に縣を越えて通用することはないが、縣内においても、先述の太原縣城商會が西南地區での錢票發行に禁止の壓力をかけるという事例からして、市鎭での獨自の錢票發行が獨自の流通圈を形成し、縣城のそれの流通を妨げるものであったに違いない。山東省の周村鎭では銀號一〇軒あまりが銅元紙幣を發行していたが、他鎭では流通せずとされていた(42)。市鎭の中には獨自の錢票通用圈を形成するものがあったのである。

さて問題はその信用である。錢票の濫發と取り付け危機はしばしば取りざたされた。太原と同樣に商會が押印して錢票發行を統制しようとした、山東省福山縣では、八萬吊弱の錢票發行に對して、三八〇〇元と五萬四〇〇〇吊の兌換準備を有していたという(43)。數値そのものの信憑性はともかく、二〇年代末からの山西や東北各省におけるような省政府紙幣による極端な財政インフレの場合と比べると、さほど紙幣準備が脆弱であるとも言い難い。

われわれが着目すべきは次の二點である。第一に、振り出された錢票は發券商號の顧客關係を越えて流通しえたということである。それは、兌換請求すると他の商號の錢票をもって換える例がある(44)、との錢票を流通させることに否定的な資料からも、逆にうかがわれる。ただしある限定された地域内においてである。第二に、金融業を專門に營むものもあるが、雜貨店などの商號が錢票發行を營んでいる場合の方が一般的であることである。ことに農產物集荷のための貨幣需給の逼迫が高じてくると、貨幣需要にあわせて、次々といろいろな業者が錢票發行に新規參入してくるのである。濟南では一九一九年から二二年にかけて錢票發行の最盛期を迎え、酒屋などまでが參入し、發行業者は千軒を越えて、錢票を印刷する印刷局までが二五〇軒にもふくれ上がった(45)。

錢票の通用性は、發行主體の信用もさることながら、彈力性に乏しい通貨供給に伸縮性を與える手段を、農產物を集荷する空間が希求していたことによる。それ故に商人たちは需要にしたがって、次々と錢票振りだしという業務に新規參入してくるのである。そこで二つの局面が生じる。一つは舊來の錢票發行者たちが、錢票濫發を半ば口實半ば本音として訴

えながら業務を制限しようとする動きである。もう一つは錢票の信用を個別の振り出し商號だけでなく全體で保證しようとするなかで、商號間の會計上の連携が生じることである。どちらにしろ、錢票の維持を動機として商號間に共同性が現れてくる。それが進むと商號間の決濟は帳簿上で濟ますということにもなってくる。(46) こうして農産物集荷の空間を基礎に商號たちの間で支拂協同體が形成されるのである。(47) ただしそれには常設店舗のある程度の集中が必要條件となる。よって市鎭より下の規模の穀物市集單獨では維持しえない。逆に言うと市集は、市鎭の支拂協同體が維持する貨幣の伸縮性の傘の下で、賣買の季節較差に對應できていた、とみなすこともできる。

一章のおわりで觸れた、中長期的には天津のような強力な吸收力をもつ市場に對して同調するものの、短期的には環節を連ねるような連動の仕方になる、という地域間の價格の趨勢をもたらす基礎には、自律性を有した支拂協同體の並列構造があった、と考えられる。

再び晉祠鎭に目を向けよう。一九〇八年一月二〇日の『退想齋日記』に、制錢不足のため晉祠鎭一帶で錢票の兌換時に千文ごとに五六十文を割り引いて「快錢」と稱するようになったことが記されている。逆に言うとそれまでは滿額で兌換されていたということになるが、これは銅錢不足に對して小錢參入で兌換準備に對應させていた錢票發券商號が、既述の一九〇七年の知縣による小錢使用禁止令を承けてとった方策として位置づけられる。着目すべきは、錢票發行商號たちが、錢需給の變動に對して、錢票の兌換方法を通じて不充分ながらも對應しようとしていたことである。晉祠鎭は縣城の商號たちと對抗しつつ獨自の支拂協同體を形成していた。

(2) 市場階層における斷層

さて前節で述べたように、農産物集荷にあわせて通貨供給に伸縮を與えるための空間の共有があり、その空間の中心にあるのが市鎭であった。だが、人々の經濟活動はけっして、その市鎭が維持する支拂協同體の中にとどまっていたのでは

ない。一章での分析のように、小農經營は定期市の中での販賣と、穀物市集を越えた市場に向けた所得獲得との雙方にわたっていた。市鎭は單一の穀物市集よりも廣い空間に影響を及ぼすが、一章で述べた黃陵村における靴底や蔬菜販賣、そしてこれから述べる赤橋村での草紙の販賣は、小店鎭や晉祠鎭のような市鎭の影響力が及ぶ範圍を越えた市場を前提にしていた。

劉大鵬は赤橋村の居住者のかなりの者が草紙製造に依據していると、繰り返し敍述している。三〇年代初期のある調査では一二七戶中七五戶が製紙に從事しており、その內二五戶は長期に從事する專業であったという。草紙製造は二萬元ほどの所得を村にもたらしている、とその調査は推測しているが、太原市を中心とする太原府內が市場であった。(48)鄰村の紙房村と陽曲縣の上蘭村が同じく産地であるが、上蘭村が災害に見舞われると、供給が減少し、草紙の相場が上がるというように、三村で太原府市場を分け合う關係にあった。(49)

その草紙の市況についての『退想齋日記』における敍述から、草紙相場が穀物相場から獨立した動きをしているものであったことがわかる。例えば、穀物相場が低落しているのに、草紙相場が堅調なために村人は助かっている、との記述が一九〇三年に殘されている。(50)すなわち晉祠鎭を單位にして相場がまず形成される穀物と、太原府の範圍で需給調整がなされ相場がつくられる草紙との違いが表れている。

さらに着目すべきは、金融の狀況と草紙市況との關連についてである。『退想齋日記』には、三一年末から三二年初めにかけて、金融が逼迫していて草紙が賣れず、價格が下がり費用を埋め合わすことができない、としている。(51)ところが、穀物についての記述では、草紙のような因果關係を金融逼迫との間に見いだすことはできない。むしろ逆に金融逼迫が穀物相場を緊張させるとの記述例がありさえする。(52)また草紙の市況については、製紙への增稅が豫想された時、草紙の相場が低落するだろう、とも記されている。(53)金融の逼迫にしろ、增稅にしろ、草紙の市場は實需とは無關係の原因によっても價格が低落する性格のものであったということになる。

ここで一章での經營分析の結果が關わってくる。小農の現金收入は市集向け販賣と、市集を越えた販賣とに分岐する傾向にあった。赤橋村における草紙は、黃陵村における蔬菜や靴底、その他の村における筵などと同樣に、太原市を中心とする太原府という廣域を市場とするものであった。市鎭の支拂協同體の保護の下にある市集の競りに供される穀物と違い、それらの商品は生產者の生活空間を越えた市場での金融狀況に賣り上げが左右されるものなのである。小農たちの志向する所得機會の多樣化は支拂協同體を越えた市場空間に依存していた。

では『退想齋日記』でいう金融の逼迫とは何なのであろうか。

日記には市場の不安定さを表現する言葉として、銀錢の缺乏あるいは金融の緊張という表現が使われている。前者の表現は主として一九二〇年頃までに使われ、それ以後は後者の表現が現れる。それら金融の異常事態を引き起こす契機はさまざまであるが、單發的な個々の金融機關の經營破綻は別にして、おおむね三つに區別することができる。

第一に、農產物が價格の上昇を伴いながら多量に移出されるような事態になると、集荷のための代價としての貨幣の調達が間に合わなくなり、その度が越すとやはり信用不安をもたらすことになる。銀錢が缺乏していると嘆かれる現象は、九六年以降におけるように、穀物價格の上昇を伴って現れる。

第二に、二六年以降にしばしば見られる、「紙幣ばかりが流通して」市場が混亂しているという狀況である。不換紙幣濫發による財政インフレのことだと考えれば、われわれの常識にもなじむものである。右の草紙に關して述べた例三一、二年のはこの範疇に屬する。

第一の場合、市鎭の支拂協同體は、錢票の兌換率を變えるなど樣々な便法で計數貨幣を增加させ、對應しようとする。また第二の場合、政府系紙幣が極端な信用崩壞をおこしているようであれば、商人たちはその紙幣の受領を拒否して、硬貨など他の通貨で相場を建てることで對處する。(54)

第一の場合も、第二の場合も、市鎭の商人たちは對應策を講ずることができたが、だが、それすらもできない場合があ

った。

一八九〇年代前半、中國では物價が沈滯していた。山西省でも同様に穀賤に惱んでいた。劉は九五年一〇月二〇日に「或いは錢或いは銀、皆周行する能わず、……粟を有する農家と雖も、而るに價錢太なはだ廉ければ、亦た錢をして餘裕有らしむる能わず。」と書き記している。周行という言葉は流通すること一般に使われてもいるが、この用例のように通貨の流通を表現するのになじんだ言葉である。『退想齋日記』ではこの「貨幣が流通しない」という表現をもって市場の不正常さを語ろうとする。

何故流通しないのか。けっして存在する錢や銀の絕對量が足らないからではない。ここでは、穀物には潛在的に在庫があるのに、價格が安いが故に錢を市中に潤わせることができない、と認識されていたのである。

同じことは、紙幣が流通の主役となった後でさえも生じている。二九年以降三二年初にかけての財政インフレの時期をすぎた後、山西省は紙幣を兌換準備にあわせて發行するようになる。だが世界恐慌を遠景とする物價下落の趨勢において、三二年以降は紙幣も足らず、市面が周行せずという事態におちいったのである。(55)

ここに擧げた二つの時期、すなわち九〇年代前半と三〇年代前半は、世界經濟全體の動向を遠因として中國全體がデフレ傾向に陷った時期であるが、もう一つ山西省獨自の事例を擧げておこう。一九二六年から二八年にかけ、軍閥戰爭のあおりを受けて、華北沿岸部と內陸部の流通は阻害され、その結果天津など河北・山東方面の物價は上昇するが、山西の物價は低落するという現象が生じる。このことは**表4**にも見て取ることができる。やはりこのときも山西は穀賤狀態に苦しんでいる。天津市場に向かって流れていた穀物移出が停止し、商人たちは在庫滯貨に苦しまされたからである。市中には硬貨が現れなくなり、これを契機に山西では紙幣が一般的に流通するようになる。(56)

市場を行き交う主役が制錢であろうと、銀元であろうと、晉鈔であろうと、三つの局面を引き起こしている動機は共通している。總通貨量が一定に近い條件だとすると、穀物のように移出可能で連關效果の大きいステイプル商品の價格を引

き上げてくれる條件、それはもっぱら遠隔地の需要増大が契機となるが、それがなければ、通貨は市場には現れず流通してくれないということである。

いわば、貨幣を引き出すための有效需要が恒常的に不足している構造の市場なのである。引き出せなければ金融は濕滯し、金利が上昇して、小規模な經營者の資金繰りを苦しくさせ、ますます信用を不安にさせる、という惡循環が待っている。

こうして、われわれは『退想齋日記』の描く赤橋村をとりまく市場の重層性の全容に、ようやく接近することができた。小農たちは、市鎭が維持する流動性に依存して穀物を中心とする生産物を競りにかける。その一方で所得機會を多様化させる志向に基づいて、市鎭を越えた太原府のような廣域の市場空間で、紙や石炭を賣るなり、家庭教師をするなりで、その廣域の市場空間が有する可處分所得總體からの分配に預かろうとする。

しかし、市鎭の支拂協同體は繁忙期の現金需給の逼迫には對應できても、閑散期に退藏されている通貨を運用する機能はもちあわせていない。まして、並列する支拂協同體の上に重なる廣域市場においては、全體として流動性を調整する機構は存在しないのである。結果的に小農たちの所得機會の多様化の志向が實現できるか否かは、その市鎭を越えた空間での景況に依存し、そしてそのためにはもう一方の穀物が高値で外に引き上げられる刺激が必要なのであった。

傳統中國における市場圈は、單に小規模から大規模なものへと、商品構成を高度にしながら同心圓的に積み重なっているようなものでは、けっしてない。支拂協同體という斷層をはさみこむことで成り立っていた堆積構造なのである。

三章　自由參入の準則と國家の介入

市鎭はいろいろな社會的機能をあわせもっていた。例えば祭祀である。ことに晉祠鎭の場合、晉祠にあるさまざまな廟の祭祀が年中行われていた。(57) 製紙を特産とする赤橋村が蔡倫を祭る祭祀をしていたように、村の規模でも祭祀は行われる

が、晉祠の迎神祭などは周邊の一〇村前後が協力するものであった。[58] 旱魃ともなれば、雨乞いの募金集めの核となり、災害となれば、振恤の中心となった。[59] 書館もある。[60] 商號が集まっているだけに、さまざまな公共機能を維持するための財團的な資産を募りやすかったのである。行政側も様々な布告を鎭で告示するなど、市鎭の機能を利用していた。[61]

本論で述べた支拂協同體としての性格も市鎭の公共機能の中に含まれるのだが、公共性を支えているのは、自由參入の放任の原則とでも呼ぶべき準則であった。錢票の發行が、雜貨店などで行われ、金融專門業者の手にまかされていないことを述べたが、このことは、業務の專門分化が遲れているというよりは、むしろ利益が見込まれる業務には投入可能な資本を有する者が次々と參入してくる結果なのである。新規參入者がふくれ上がり、利益の配分が見込まれなくなる時點に達すれば自ずと淘汰が始まる。

自由參入の準則は、金融業務や市鎭だけにとどまるものではない。山東省のある鄕鎭では、戶數の增加が、移住よりも分家と何よりも新しい職業への就業によるものであり、おおむね一〇年以下の商歷であった、との事例がある。[62] 新しい所得機會があれば次々と參入していく志向が強力に働いていたのである。一章で述べた市集外へ所得機會を多樣化させていく小農の經營もそうした自由參入原則の表れなのである。

新規參入に對する障壁が低いということは、不斷の競爭に追い立てられることでもある。競爭は時に衝突をもたらし、調停が必要となる。だがその調停の役割をはたすことも、全ての人々に開かれている。契約に際して仲人となり、破棄において仲裁者となる機會は誰にでもありえた。[63] ただし人々の交涉能力は均等ではなく、劉大鵬のような人物が調停者として重寶がられるのも避けがたいことであった。

市鎭は自由參入原則を束ねる場として機能していたのであり、中國王朝はそこで牙稅徵收などを誰かに請け負わせるだけで、直接介入をせずに秩序維持をはかってきた。だが、二〇世紀とともに、新しい志向が動き出す。光緒新政に始まり、民國にはいってから軍閥省政府により本格化する諸改革の過程で、市鎭は從來持っていた機能を、縣と村の上下に分

斷されるようになる。

民國期に盛んになる鄉村建設の動きには様々な局面があるが、村獨自の財産を形成させ、農業金融や教育などの公共的業務を自立自助で行わせようとするものであった、とみなしてよい。[64] 閻錫山治下の山西省も村治運動を喧傳することしきりであった。[65] だが見方を變えると、それまで市鎭の規模でになっていた範疇の公共業務を、村の規模で集約しようとする動きでもあった。そのことにより省政府側は稅徵收效率化をはかることができるのである。山西省政府の場合、しまいには村に紙幣發行機能をもたせようとしたが、受領されず失敗している。[66]

省政府は民國に入ってから次々と幣制改革をうちだしてくるが、その本質的な目的は、自律的な支拂協同體を解消させ、その貨幣需給調整機能を、縣そしてやがては省銀行に吸收することにあった。

まず最初は貨幣單位の統一化である。山西省は全國で最も遲くまで制錢流通が殘存した省であったが、銀兩・制錢の使用をやめて、銀元・銅元の畫一的使用を命じた一九一九年二月の「劃一幣制暫行規則」公布以降、銅元の流通が本格化しはじめる。未清算の銀兩建て債務は「當地最公平の市價」で銀元に換算し、制錢の場合は、「各縣習慣錢色、錢數同じからざるあれば、應に最公平の市價を以て」銅元に換算させる、としたが、そのねらいは、以後阡陌を許さず、すなわち地域經濟が獨自の支拂い規則をもつことを押さえ込もうとしたところにある。[67]

同時に發布された「山西省發領銅元規則」では、縣と商會が確認した上で發券を許可された商號に銅元を受領させるとしている。[68] 縣を介在させているものの、この段階では商號たちによる貨幣需給調整はまだ可能である。

ところが、北伐期の混亂を契機に、一般的な貨幣單位が銅貨建てから銀元建てに、通貨そのものも硬貨より紙幣の比重が高くなった一九二九年、「取締各縣紙幣規則」が出され、商號の發券は禁止され、發券機能は山西省銀行に獨占されることとなった。銀元硬貨は一定以上の枚數の移動に許可を要するようになったことにより、市場から一齊に退場してしまう。[69] 商號は四割以上の準備を條件に晉鈔を代理發行できることになっていたが、やがて三二年にかけて財政インフレが急

速に進行し、晉鈔は受領されなくなる。既述の村紙幣發行は、その後の收拾策としてでてくるのだが、成功せず、結局一九三六年、一等縣十萬元、二等縣八萬元、三等縣五萬元を限度として、縣銀號が山西省銀行より兌換券を借用し、それを兌換準備として十仙、二十仙の小額紙幣を發行するということになる。(70)

このようにして省政府は、縣ときには村を基礎とする貨幣供給の制度をつくりあげ、市鎭の商號たちの自律的な貨幣需給調整機能を削いでいったのである。だが、それはけっして市場の安定にはつながらず、人々はデフレと惡性インフレの間の激しい振幅に苦しむことになったのである。(71)

おわりに

傳統中國において地域經濟とは何を指すのか、と問われれば、市鎭を中心に形成される支拂協同體の空間こそが該當するというのが、本論の主張するところである。(72)その空間はけっして閉鎖的なものではない。市場では、利益が見込まれる業種への自由な新規參入が保證される傾向があり、(73)また商品や勞働力の移動に制度的な障害はさほどない。しかし、その自由な空間においてさえも、市場行爲を媒介する通貨の需給を調整する機構は必要であり、空間を共有させるのである。(74)

そしてこの機構は行財政の機構からは自律的であろうとする。なぜなら行財政との癒着は、行財政業務に關わる人々を優位に立たせ、自由參入を準則とする競爭秩序と抵觸するからである。傳統中國のような「自由な社會において、秩序はいかに可能か」と問われれば、(75)自由參入を準則とする競爭こそが秩序をつくり、それが傳統中國の公共性を特色づける、というのが本論の含意である。その公共性は、特許權に象徵されるように、參入障壁を利用した競爭の原則をうちたてた西歐のような社會とは、異質な秩序をもたらさざるをえない。

清朝はこの地域經濟の秩序に依存していたのだが、二〇世紀に入ってからの權力側からの諸改革のように、その存在を否定して統合しようとすると、それには非常な困難をともなったのである。

註

（1）本論は黒田『中華帝國の構造と世界經濟』名古屋大學出版會、一九九四年、であいまいにすませてしまった問題を一部分ながらも明らかにすることを課題としている。『中華帝國の構造と世界經濟』においては、傳統中國では、對外收支と連動して內部の純貨幣流通量が伸縮するような地域經濟が存在せず、そのような地域經濟が存在した日本などとは異なり、重商主義的な國民經濟を志向しない市場が機能していた、としている。日本や西歐では、封建領主のような地域權力の存在が順貿易を志向する地域經濟空間の實現の前提條件となった。だが地域の經濟的營爲に自らの存在も組み込まれたような地方權力の存在しない傳統中國のような狀況において、地域經濟などと稱しうるような實體があったのか、ということが問題となる。

（2）本論は、定期市そのものの分析を目的とするものではないので定期市研究の整理は省略する。ただ從來の研究成果は、市集の階層性を明らかにしてきたが、その階層性の解釋には經濟學的な檢討の餘地が殘されているように思われる。本論では貨幣需給の季節性との關連が問われる。中村哲夫「清末華北の農村市場」野澤豐・田中正俊編『講座中國近現代史』二卷、東京大學出版會、一九七八年は、諸々の市集についての稅制上の區分と商品構成上の區分を整理し、棉花などの集荷效率と市場規模の對應を指摘している。

（3）喬志强標注、山西人民出版社、一九九〇年。刊行されたのは、全文ではなく、史料價値が高いとされる部分であるとしている。以下では西曆年月日を以て引用する。好並隆司「『晉祠志』よりみた晉水四渠の水利・灌漑」同『中國水利史研究論攷』岡山大學文學部研究叢書九、一九九三年も『退想齋日記』について觸れている。また我々はすでに農村在住の知識人の意識に上る空間の範圍について、やはりある日記から檢討した研究結果を知っている。太平天國支配の頃の江南の事例であるが、村の外に常に耳目を向けている一方で、その範圍はおおよそ縣の行政域の內にとどまっていた。稻田清一「清末江南における一鄉居地主の生活空間——その範圍と構造についての試論」『史學雜誌』九九—二。劉においてもほぼ同樣の傾向が認められる。

（4）Philip C. C. Huang, *The Peasant Economy and Social Change in North China*, Stanford U.P., 1985. のように、零細經營における過度の勞働集約化が餘剩勞働を吸收するため雇用勞働析出をさまたげた、という文脈でとらえるのではなく、市場の側に土地經營の零細化を小農にとっての選擇肢とさせる條件があった、との視角が必要である。土地に對する勞働力比率に目を奪われず、兼業による所得機會との比率に着目すると、必ずしも勞働力は過剩であるとは言えず、むしろ求められているとみなすべき局面もある。

（5）華北交通株式會社實業部編『北支農村の實態——山西省晉泉縣黃陵村實態調查報告』東京、一九四四年、（以下『黃陵村』と記す）は軍事占領の下で行われた調查に基づいており、もとよりその信賴性は疑ってみるべきものである。同書

は縣一般の概況を述べた部分と、黄陵村にしぼった記述の部分とに分かれているが、例えば前者の部分の一六頁で、縣内二一個村の戸口・人口と經營分類を表に記し、赤橋村を一〇五戸からなり、小作五〇、農業外四七戸としているが、他村に比べて小作分類があまりに多く、『退想齋日記』からことさらに小作農が多いような記述は乏しいが故に、疑問が生じるところである。ただ二一個村中、赤橋・紙房兩村のみが農業外戸數が多いとされることは、應魁「蘭村紙房赤橋村之草紙調査」『新農村』三・四期、で草紙製造の專業從事戸として赤橋村で二五戸が數えられていることと符合する。また總戸數も「蘭村紙房赤橋村之草紙調査」で記されている戸數より兩村とも少ないがさほどかけ離れたものではない。

『退想齋日記』での記述の意味するところが、『黄陵村』での調査結果とのつきあわせによって、より具體的に把握可能となる點も多い。なお、奥村哲「日中戰爭前後の華中農村調査をめぐって――江蘇省無錫縣の場合」『人文學報』（東京都立大學）二三八は、日本の戰時占領下の農村調査について、他の史料との突き合わせによる相對化の必要性を述べている。『黄陵村』を利用した研究として、吉田浩一「二〇世紀前半華北穀作地帶における農民層分解の動向」『東洋史研究』四五―一があり、低生產力地帶として位置づけている。

（6）錦織英夫『山西農業と自然』北京、一九四一年、九八頁。太原縣附近は小麥の畝當たり收量が大きく、棉花との畝當たり收益の差が少ない。

（7）『退想齋日記』九五年七月一六日、一六年七月一日、一四年七月一二日。

（8）晉祠離老泉は毎秒七〇立方フィートの湧水で一萬畝を灌漑していたとされる。全國經濟委員會『山西考察報告書』一九三六年、編譯彙報七九、上海、一九四二年、二七四頁。また『退想齋日記』一六年一〇月一一日の記述からして粟と冬小麥を搭作しているようにもみられ、晉水の水利によって例外的に惠まれたこの地域は、單なる一毛作ではなかったようでもある。

（9）『退想齋日記』一三年八月一三日。

（10）太谷縣南席村の票號の家で九六年から家庭教師として從事していた。同右、一九〇四年一二月二二日、〇七年二月七日。

（11）同右三〇年一月一二日、太原縣の稻作が八〇〇〇畝で收量一五〇〇〇石であったとして計算。『黄陵村』一七頁、東亞同文會『支那省別全誌　山西省』東京、一九二〇年（以下『省別全誌』）三六三頁。

（12）なお劉大鵬の父は木材商店を營んでおり、その父からの仕送りがかつてはあったはずである。

（13）『省別全誌』五五八頁、『黄陵村』二二頁。

（14）『退想齋日記』一三年二月二一日、一五年一月二八日。

（15）同右二六年一一月二日、『黄陵村』二二頁。

（16）長工の雇用は恆常的にではなく、いても一人であった。一〇畝餘の耕地では長工はさほど必要でない。二〇年代半ば王なる長工を數年雇用していたようである。『退想齋日記』二六年四月二九日。

（17）東洋文庫に『山西晉泉縣最新主要出品及戸數距離簡要地

圖』なるものが晉泉縣知事常毅夫の編製として收められている。明らかに日本占領軍の企圖の下に作られたものであるが、記載したほとんどの村に戶數が附記されている。それによると赤橋村は一〇三戶、西鎭村三〇戶、花塔村五五戶となっている。硬底村の記載はないが、假に塔院村の二八戶を充てるとして、四村で計二一六戶となる。軍事占領下の調査故の遺漏は當然考えられるが、前述のように一九三二年頃の狀況を描いたと思われる應魁「蘭村紙房赤橋村之草紙調査」では赤橋村の戶數を一二七戶としており、『地圖』と大きな差はない。

(18) 正太鐵路の太原の次驛である北營から西南二キロに位置していた。

(19) 『退想齋日記』一九年六月一八日。

(20) ただし何が副業收入と雜業收入とに分類されたのかが明らかではないため、兩項目を合算したが、その點で精度に缺ける。なお鐵道の存在が二つの傾向の分岐を鮮明にしたといえる。

(21) 『黃陵村』四八頁。劉大鵬の經營も同樣といえる。

(22) 同右九二頁、七三戶の婦女子が從事し、太原の靴商が材料などを供給した。屯留縣崔蒙村の調査では一一〇戶中一〇〇戶が席編みに從事し二萬元の利益をあげていたとされている。天野元之助『山西農業經濟とその崩壞過程』大連、一九三四年、一〇頁。

(23) 奥村哲「日中戰爭前後の華中農村調査をめぐって」も、貧窮化でなく、都市經濟への包攝などが零細化を導くことを指摘している。

(24) J. L. Buck, *Land Utilization in China*, Statistics, Nanking, 1937, p. 149.

バックの調査が殘している價格趨勢指數はその調査地域の三人からの回答を基にしたものであるとされているのみで、變化が激しかった中でそもそもどの通貨單位をもって回答し、その換算はどうしていたのかといった經緯が明らかではない。しかし各地域の指數の間の相關性、また『退想齋日記』の敍述と山西のバックの指數とのおおよその合致は、史料としての信賴性を相互に保證してくれている。たとえばバック統計に記されている渭南での小麥價格の一九〇一年頃の急騰は、『退想齋日記』でも確認される。なお指數は粟や高粱、冬小麥を中心として各地ごとの加重平均で算出されたものとされる。

(25) 競賣買については、森嶋通夫『無資源國の經濟學』岩波書店、一九八四年、一章二節、競りの構造。

(26) ただし、穀物市集において、賣り手が團體をつくり、外部の者の賣買を禁止する慣習のある地方もあったという。『省別全誌』三八六頁。

(27) 例えば、綿作農村の河北省寺北柴村の調査で、棉花を商人が直接買い付けにくることはないのかとの質問に對して、前村長である回答者は、商人が來ると値段が高くなったと思い、市に行かぬとどれくらい高くなったかわからないので誰も賣らない、と答えている。『中國農村慣行調査』岩波書店、一九五五年、三卷三二五頁。

(28) 西山武一「山東の一集市鎭の社會的構造」北京大學農村經濟研究所『研究資料』八號（一九四二年四月）原載、『アジア的農法と農業社會』東京大學出版會、一九六九年、所收。

(29) 『民國青縣志』卷之一　集會。各集はみな人工市を附設するが、無集の地方でも人工市のみを設けるところもある、としている。この史料は中村哲夫「清末華北の農村市場」で觸れられている。

(30) 『退想齋日記』二八年六月八日、三一年九月一一日。

(31) 同右三三年九月一一日、西山武一「山東の一市集市鎭の社會的構造」でも他縣から泊まりがけで來る短工の存在を指摘している。

(32) 劉容亭「山西陽曲縣二十個鄉村概況調查之研究」『新農村』三・四期。村ごとに日雇い賃金に差がある。一角から三角まで。日毎に變動するものなので信頼性は薄いが、近鄰の皇后園と向陽鎭が一角五分なのに南塞が三角であったりする。

(33) 交通と商品取り引き規模の關數として市場圈をとらえる中心地理論の考え方には限界がある。註（74）。

(34) 例えば河北省青縣は縣城の區と東西南北四區に分けられたが、それぞれの區には鎭のほかに穀物市を開く集市が三、四存在した。『民國青縣志』卷之一　集會。

(35) 『黃陵村』二一頁では、太原縣の米移出一四九〇〇石で、紙一〇萬刀と並び重要な移出品としているが、そのほとんどは豐かな水を利用した晉祠周邊の産出であった。

(36) 「晉省禁止錢舖買空賣空之新令」『中外經濟周刊』一〇二號、錢市投機は冬にはげしい、としている。『退想齋日記』一六年六月一五日。

(37) 當一〇などの額面の銅元に置換しても、一九二〇年代には物價水準も上昇しているので、事態にさほどの變わりはない。一九二〇年代半ばの河北省西部邢臺縣での一日の生活費銅元五〇枚であるとされる。民國五年は一〇枚だったという。ただし西部山川地方は二、三〇枚で足りるとしている。「邢臺縣之經濟狀況」『中外經濟周刊』一九一號。

(38) 水野薫「山東の一農村（張耀屯）に於ける社會經濟事情（下）」『滿鐵調查月報』昭和一〇年八月號。

(39) 「濟南之金融機關與通貨」『中外經濟周刊』八四號。ただし、この利率は銀元建であり、このかぎりでは都市部から農村部に銀元が出ていくことを反映しているのみである。

(40) 『退想齋日記』九七年七月三一日、一九〇七年五月二日。

(41) 同右一六年三月二一日。

(42) 「山東歷城長山等縣經濟情形之調查」『中外經濟周刊』一九〇號。

(43) 「山東各縣銀錢號資金及紙幣發行額之調查」同右一八四號。

(44) 「濟南之金融機關與通貨」。

(45) 同右。このように錢票が二〇年代前半に何故ふくれ上がったかということなどは、中國一國の說明では不充分な現象なのであるが、本論では捨象した。黑田「アジア在來金融からみた二〇世紀初期の世界經濟」『歷史評論』五三九號。

(46) たとえば壽陽縣では、現金によらず、克錢と稱して、制錢

一串文に對して一串二百文の交換率で帳簿上で貸借決濟をする慣行が形成されていた。『省別全誌』八〇五頁。

(47) 「支拂協同體」という用語については黑田『中華帝國の構造と世界經濟』一四、二一頁。表現そのものは宮下忠雄による。

(48) 應魁「蘭村紙房赤橋村之草紙調査」。草紙は日用品として使用されるほかに、建設用の石灰粘着に用いられた。

(49) 『退想齋日記』九二年八月一三日。

(50) 同右一九〇三年一〇月二四日。

(51) 同右三一年一二月一八日、三二年一月一七日。

(52) 同右二九年一二月一一日。

(53) 同右一五年五月二〇日。

(54) 三〇年から三二年にかけて晉鈔の濫發と銀元硬貨との兌換率の暴落が進行するが、『退想齋日記』では三一年五月一七日に、夏に入って以來、市價表示を晉鈔と銀元に分けるようになったと、記述しているが、それ以降日記に記される物價は紙幣か現洋かが明記されるようになる。三一年二月に晉鈔一元はなお銀元〇・七一七元に兌換されたが、三一年五月には〇・三三三元となり、以下つるべおとしで、三二年二月には〇・〇四一元となっている。楊蔚「山西農村破產的原因」『新農村』三・四期。

(55) 『退想齋日記』三四年五月一八日。歲末の清算時期に商人は債權をほとんど回收できない狀況に陷った。同右三三年一月二五日。

(56) 同右二六年五月三一日。

(57) 劉大鵬の著した『晉祠誌』卷七・八、祭賽、には晉祠で行われる祭祀がまとめられている。

(58) 『退想齋日記』九二年一一月六日、九四年四月一七日。

(59) 小店鎭では雨乞いの募金數千串を集める核となっている。同右一六年八月二六日。江南でも市鎭が救荒のための結節點となっていたことが指摘されている。稻田清一「清代江南における救荒と市鎭——寶山縣・嘉定縣の「廠」をめぐって」『甲南大學紀要』文學篇八六　社會科學特集。晉祠鎭でも劉なるものが、東庄・萬花堡・蒿荒兒の三村に施し米をしたことが記されている。『退想齋日記』九六年八月二四日。

(60) 太原縣では縣城と小店鎭・北格鎭・南堰鎭・晉祠鎭の四鎭に書館が置かれていた。『晉祠誌』卷一七、鄉校下、蒙養學堂。

(61) 罌粟栽培の制限や銀元の發行などの布告が晉祠鎭で揭示された。『退想齋日記』九三年一一月二九日、九八年一月一四日。

(62) 西山武一「山東の一市集鎭の社會的構造」。

(63) 劉大鵬は債務などをめぐる調停をしばしば依頼されたが、縣が區ごとに調解委員會をつくると委員に招請されている。『退想齋日記』三二年一一月一日、三三年五月三一日。

(64) 鄉村建設運動では河北の定縣での實踐が著名である。濱口允子「翟城村治——近代中國における鄉村再編成の試み」『人間文化研究年報』五。

(65) 閻錫山の序がある村政處校印『山西村政彙編』民國一七年は、その盛んな啓蒙の様を傳えてくれるが、官と民の間に橋

をかけるものとして、從來の土では不足であるとし、商人を稱揚しようとしている。

(66) 『退想齋日記』三四年五月一八日、一〇月二一日、二二日、二三日。

(67) 中國人民銀行山西省分行・山西財經學院金融史編寫組編『閻錫山和山西省銀行』北京、一九八〇年、三七頁。

(68) 『銀行週報』一一五號、山西創行銅元兌換券。

(69) 『退想齋日記』二九年一一月一日。三〇年二月二日には、罰則を犯して省城から銀元一七〇元を持ちだそうとした太谷の商人が捕まり三〇元の罰金をとられたとの傳聞を記している。『閻錫山和山西省銀行』三九—四〇頁。

(70) 朝鮮銀行調査課『山西省に於ける金融經濟概況と金融機關の內容』京城、一九三七年、一九頁。

(71) 一九三〇年代の閻錫山の財政政策を取り上げた研究として、內田知行の連作がある。「閻錫山の財政整理事業」『一橋論叢』九一—六、「一九三〇年代における閻錫山政權の財政政策」『アジア經濟』二五—七、「閻錫山政權と一九三〇年代山西省における經濟變動」『現代中國』五八。

(72) 現地商人の會合が、何が通用する通貨かを決め、價格をも管理する、中世南インドの地方市場の事例なども、支拂協同體の存在の普遍性を窺わせる。Kenneth R. Hall, 'Price-making and Market Hierarchy in Early Medieval South India', in Sanjay Subrahmanyam edi., *Money and the Market in India 1100-1700*, Delhi, 1994. ただし傳統中國におけるそれは、商人集團の人的流動性が非常に高い事例であったと思われる。

(73) 小農たちは生產者であると同時に賣買の仲介者にもなりえた。Susan Mann, *Local Merchants and the Chinese Bureaucracy, 1750-1950*, Stanford U.P., 1987, p. 175.

こうした傾向もけっして傳統中國に固有のものだったのではない。例えばジャワの現地市場 pasar に集う小農たちにも同樣のことが指摘されている。Alice Dewey, 'Capital, Credit and Saving in Javanese Marketing', in Raymond Firth and B. S. Yamey, *Capital, Saving and Credit in Peasant Societies*, London, 1964.

(74) クリスタラーらによって創られた中心地理論は、運賃などの移動經費から決定される經濟的距離をもって、ある商品の賣買の範圍を決定する重要な要因とみなし、その方法はベリーなどに繼承され、スキナーの中國での定期市研究は、それを補強する事例としての役割を果たしている。Walter Christaller, *Die Zentralen Orte in Süddeutschland*, Jena, 1933, SS. 52-63. Brian J. L. Berry, *Geography of Market Centers and Retail Distribution*, Englewood Cliffs, 1967, pp. 93-99. 傳統的農村市場を分析する際に、その手段として中心地理論を用いることの缺陷は、この理論が、媒介財すなわち貨幣の調達の空間的限界が商品需給に與える獨自な影響に氣づいておらず、信用供與を單なる上級市場の一つの屬性とみなすことにある。

(75) 岸本美緒「「市民社會」論と中國」『歷史評論』五一七號。

commanders of the armies which advanced into the areas held by the Southern Song, only Seng'ü returned to South China.

THE DETERMINATION OF BOUNDARIES OF REGIONAL ECONOMIES IN TRADITIONAL CHINA: THE CASE OF TAIYUAN 太原 COUNTY IN THE EARLY TWENTIETH CENTURY

KURODA Akinobu

What is a regional economy? What determine its boundaries between inside and outside? Through an analysis of households in a village in Taiyuan county, it was determined that the peasants of traditional China received two types of cash incomes: Income from the sale of products at periodic markets, and income from the sale of products to outside markets. The latter enabled peasants to diversify their income sources. However, the prices of commodities intended for outside markets, such as straw paper, moved independently from the prices of commodities sold at periodic markets, such as cereals, where spot dealing was common. This fact implies that there existed economic borders that reflected the different price movements contained therein.

Jincizhen 晉祠鎭, one of four rural towns in Taiyuan county, functioned as a center of a payment community that covered periodic markets. Merchants in this town issued cash notes which circulated only within the immediate area. The payment community was enabled to respond to the fluctuations of currency demand through the supplying of credit by town merchants. The difference between markets, whether located within the payment communities or not, was responsible for the different price movements of commodities such as those mentioned above.

From this it can be concluded that markets in traditional China did not form a hierarchy based simply on size, as central-place theory suggests. Rather, they were, in fact, divided by autonomous payment communities.

The Shanxi provincial government, under the military lord Yan

xishan 閻錫山, attempted to force counties or villages to issue currency notes, thereby disbanding the payment communities that intervened between counties and villages, in order to cause governmental fiscal policies to have a direct effect.

However, the result of these administrative interventions was to make the monetary flow in local markets more unstable. This failure of the provincial government policies resulted from neglecting the function of the payment communities, which autonomously maintained local liquidity.

ON THE ORIGINS OF PRIVATE LANDHOLDING IN THE AREAS CONQUERED BY THE ARABS

MORIMOTO Kosei

The assassination of the third Caliph 'Uthmān by disaffected elements among Arab warriors from the garrison towns was a serious occurrence which caused a crisis for the nascent Muslim state. During this period of the assassination of 'Uthmān there occurred the active acquisition of private landholdings by 'Uthmān and other Companions of the Prophet. This fact has already been noted by al-Ya'qūbī, the 'Abbāsid historian. In order to establish of treatises on the land system in Islamic law, Muslim scholars of the early Islamic period emphasized that following the Great Arab conquests, there existed land that continued to be used by the indigenous farmers, whose possession of such was recognized. In addition, there existed unowned land which had been under the jurisdiction of the Sassanid Dynasty and others, and which was confiscated and given the designation of *ṣawāfī* or state land. 'Uthmān gave land from this *ṣawāfī* to the Companions of the Prophet as *qaṭī'a*. This interpretation is followed by most modern scholars.

However, such an interpretation cannot be supported on the basis of a careful evaluation of the documents. This paper makes clear the fact that 'Uthmān's transferral of land resulted from a specifically political policy that was concerned with the class of Muslim leaders who wielded special